

週4日、約30人が通う。牟田さんは「作品展やロコミで知って来てくれます」。7歳の三女と来た渡辺香奈さん(41)は「自由に伸び伸びと創作ができるから、みんな楽しそう。先生の人柄なのでしょうね」。

牟田さんが絵画教室を始めたのは29年前。大学卒業後、画家寺田健一郎氏(故人)と出会ったのがきっかけだった。同氏に滄桑を習い、夫人が自筆で子どもに絵を教える姿を見て「いつか自分も」と思ったという。そして、本人が「奇跡」と言う新たな出会いがNPO法人への道を開いた。

創作から優しい街へ

2006年、大宰府市の九州国立博物館の開館事業として「サッカーワールドカップアジア代表日本F15」があった。「サッカーと芸術の融合を旨指す」市民参加型のワークショップを主催した著名な現代アーティストの日比野克彦さんと、牟田さんは出会う。

斬新な発想に感銘を受けた牟田さんは、継続して催される日比野さんのワークショップのサポートを教室の子どもたちや保護者らと担うようになった。その活動の中で、日比野さんから「組織化して、今以上に地域貢献できるようにした方がいい」と勧められた。

11年にNPO法人へ。大宰府天満宮や市とも連携し、多彩に活動する牟田さんは言う。「体に優しい画材などにはこだわるけど、賞狙いではないです。アートを通して優しい気持ちの人が増えると、優しい街になると思っていますよ」

子どもが楽しい空間

四王寺山麓の住宅街(大宰府市観世音寺)にある「NPO法人大宰府アートのたね」のアトリエ兼牟田さん宅に水曜日の午後、小学生が三々五々集まってきた。「今日は織物をしようか?」。牟田さんから年女児(11)に声をかけた。こつくりとこなづく女の子。

地元や佐賀県基山町などから

女性アート指導者 地域に根付く



①牟田さんのアトリエでは子どもたちが伸び伸びと創作を楽しんでいた(右列の中央が牟田さん)